

血管拡張性肉芽腫様外観を呈した石灰化上皮腫の3例

阿部佳容子, 稲垣 安紀, 幸田 衛, 植木 宏明

症例1: 53歳女性. 左後頭部に赤褐色の腫瘤が約1か月前に出現, 増大してきた.

症例2: 29歳男性. 左鼻翼外側に赤褐色の腫瘤が約半年前に出現, 徐々に増大してきた.

症例3: 5歳女児. 右耳前部に赤褐色の腫瘤が約半年前に出現, 徐々に増大してきた.

3症例とも血管拡張性肉芽腫様の外観を呈したが, 触診上, 腫瘤内にやや硬い小結節を触知した. 組織学的には, いずれも石灰化上皮腫の所見を示し, 腫瘍周囲には毛細血管増生を伴っていた.

自験例の赤色調の外観は, 毛細血管増生によるものであり, 上方への突出は, 皮下組織に乏しく, 下床に硬骨が存在する部位に病変が出現した場合に機械的刺激を受けることにより肉芽腫性の反応を呈したものと考えた.

触診上で腫瘤内に硬度の高い結節性病変を触知することは, 本疾患の診断に際し, 重要であると考えた.

(平成元年6月14日採用)

Three Cases of Calcifying Epithelioma with Granuloma Pyogenicum-Like Appearance

Kayoko Abe, Yasunori Inagaki, Mamoru Kohda and Hiroaki Ueki

Three patients with benign skin tumor, calcifying epithelioma, are described. Each of their tumors is represented by an unusual clinical feature that closely resembled to the appearance of granuloma pyogenicum. On total excisional biopsy, these lesions showed the typical construction of pilomatricoma consisting of the islands of epithelial cells, basophilic cells, and shadow cells. Interestingly, the tumors were surrounded by the mucinous stroma which were rich in capillaries like those of the granuloma pyogenicum.

Furthermore, we advance the importance to find an elastic firm mass in a red tumor by a palpation to make precise diagnosis of calcifying epithelioma with unusual appearance. (Accepted on June 14, 1989) *Kawasaki Igakkaishi* 15(3):543-546, 1989

Key Words ① Calcifying epithelioma ② Granuloma pyogenicum
③ Pilomatricoma

はじめに

石灰化上皮腫は、日常の外来診察においてしばしば認められる疾患である。今回我々は、外観上血管拡張性肉芽腫様であった非定型的な石灰化上皮腫の3症例を報告し、若干の文献的、ならびに臨床的考察を試みたい。

症 例

〔症例1〕

患者：53歳，女性（B08120）

初診：昭和62年10月3日

家族歴・既往歴：特記すべきことなし

現病歴：昭和62年9月頃より左後頭部に赤褐色の小丘疹が出現し、約1か月の経過で拡大隆起してきた。同部の外傷の既往については不明である。

現症：左後頭部に6×7×6mmの赤褐色で亜有茎性の腫瘤を認める（Fig. 1）。表面は平滑で、触診では中心部に弾性硬の小結節を触知した。

組織所見：真皮内に囊腫様構造を認め、壁は主として basophilic cell よりなり、shadow cell も一部混在している。囊腫は一部破裂して、肉芽組織が内腔へ入り込み、多核巨細胞を認める。囊腫の周囲には毛細血管の増生や線維芽細胞を多数認める。

〔症例2〕

患者：29歳，男性（C06304）

初診：昭和60年7月5日

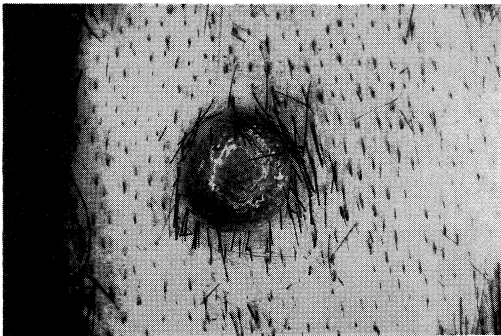


Fig. 1. A red tumor on the left occipital region of Case 1. The lesion is 6×7×6 mm in size.

家族歴・既往歴：特記すべきことなし

現病歴：昭和60年1月頃より、左鼻翼の横に赤褐色の小丘疹が出現し、およそ半年の経過で徐々に増大してきた。同部の外傷の既往については不明である。

現症：左鼻翼外側に6×6×4mmの赤褐色の腫瘤を認める（Fig. 2）。表面は平滑で、一部にびらんを認めるが、出血や内容物の排泄などはなかった。触診では、弾性軟な腫瘤の中に不整形のやや硬度の高い病変を触知した。

組織所見：真皮内に島状に境界明瞭な腫瘍塊を認める（Fig. 3）。腫瘍周辺部は主として、

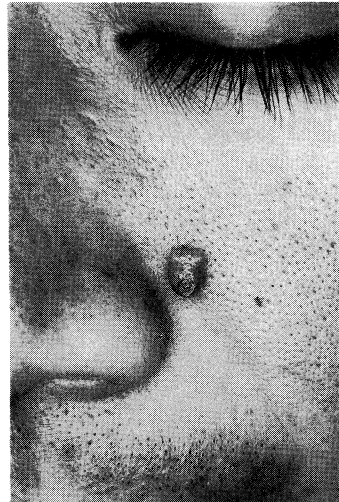


Fig. 2. A red tumor on the left lateral side of nasal ala (Case 2). The lesion is 6×6×4 mm in size.

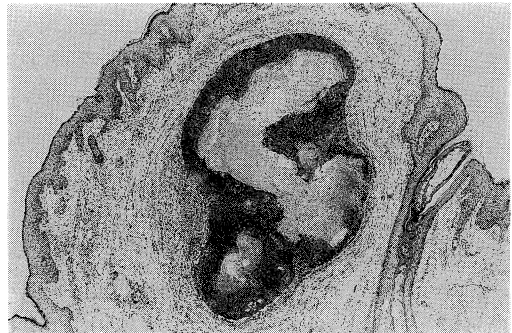


Fig. 3. Histopathological findings of the lesion (Case 2). Two types of cells compose the island. The stroma contains giant cells and abundant capillaries. (H-E staining, original magnification ×200).



Fig. 4. A red tumor of the Case 3 on anterior part of right ear. The lesion is 5×4×4 mm in size.

Table 1. The clinical variety of the calcifying epithelioma

1. 水疱様 ^{2)~5)}	5. 皮角様 ⁸⁾
2. 囊腫様 ^{6),7)}	6. 血管拡張性肉芽腫様 ^{6),9)}
3. 潰瘍性腫瘤状 ⁶⁾	7. その他
4. 腫瘤状 ⁸⁾	

basophilic cell, 中央部の大部分は shadow cell より構成されている。腫瘍の周囲には毛細血管の増生や多数の異物巨細胞を認める。

[症例3]

患者：5歳，女兒（B85266）

初診：昭和60年1月30日

家族歴・既往歴：特記すべきことなし

現病歴：昭和59年8月頃より，右耳前部に紅色の小丘疹が出現し，およそ半年の経過で次第に拡大隆起してきた。同部に外傷の既往はあるが，詳細は不明であった。

現症：右耳前部に 5×4×4 mm の赤褐色の腫瘤を認める（Fig. 4）。表面は平滑で，毛細血管拡張を伴い，触診では，症例1・2と同様に中心部にやや硬い小結節を触知した。

組織所見：真皮中層部に腫瘍塊を認める。腫瘍は，basophilic cell, shadow cell, ケラチン様物質より構成されている。また腫瘍周囲は浮腫状で，毛細血管の増生を認める。

以上の病理組織学的所見より，3症例とも石灰化上皮腫と診断した。

考 按

石灰化上皮腫の臨床型には一般によく認められる，被覆表皮に異常を認めない皮下腫瘤型のほかに，Table 1のような外観を呈したものが非定型症例として報告されている。¹⁾このうち，自験の3例については，血管拡張性肉芽腫様と考えられ，上記にあるほかの種々の外観も基本的には石灰化上皮腫をとりまく軟部組織の変化に依存していると考えてよい。

また1979年に Hadlich らは，本症の病型を病変の存在位置により組織学的に，1) oberflächliche 型，2) mittlere 型，3) tiefe 型の3型に分類している。¹⁰⁾これによると自験例はいずれも上部に突出した oberflächliche 型に分類される。そして赤色調の外観は，病理組織上で認められた毛細血管増生を伴った間質の変化によるものであると考えた。

石灰化上皮腫は，頭頸部から肩甲部にかけて好発し，通常単発性の皮下腫瘤として存在することが多い毛包系の良性腫瘍である。その外観は平坦あるいは半球状に隆起し，正常皮膚で覆われた腫瘤であると教本には記載されているが，自験例のように全く異なった症状を呈する症例もあることがわかった。木村⁶⁾によると，37症例中何らかの被覆表皮の変化を伴うものは，単なる色調の変化のみを示す症例を含めると65%も存在したと報告している。代表的な表皮の変化は，Table 1に記述したごとくであるが，隆起性病変の形態を示す特殊型の石灰化上皮腫では水疱様外観を呈する症例の報告が多く，自験例のような血管拡張性肉芽腫様と記載された症例は少ない。木村⁶⁾は1例を石灰化上皮腫に合併した毛細血管拡張性肉芽腫と記載しており，山崎¹¹⁾も周辺部皮膚にポトリオミコーゼ（血管拡張性肉芽腫の別称）を合併した症例を報告している。

一方，血管拡張性肉芽腫は，軽微な外傷後に生ずることの多い，限局性の毛細血管増殖と肉芽腫形成が特徴の良性疾患である。そのため自験例のように真皮，皮下に硬度の高い病変が存在した場合，外力によって微細な外傷が生じ，

その後周囲に血管拡張性肉芽腫様組織病変が形成されたものと推測した。またその軽微な外傷が生じた際にリンパ管に病変が及べば、前述の水疱様外観をとるのではないかと想像した。

石灰化上皮腫は日常診療上よく経験する疾患であるが、外観上多彩な二次的变化を伴う疾患と考えられた。そしていずれの病型にして

も触診によって中心に硬い小結節を触知することが鑑別診断上重要と考えられた。

また経時的に病変の推移を観察した報告はまだないが、自験例のような間質反応が皮膚病変部における異物排除反応、つまり trans-epidermal elimination の一過程として起こっているのではないかと想像している。

文 献

- 1) 繁益弘志, 木村俊次: 囊腫状の臨床・組織像を呈した石灰化上皮腫. 臨皮 42: 449—453, 1988
- 2) 中村絹代: 水疱様外観を呈した石灰化上皮腫. 臨皮 29: 947—950, 1975
- 3) 金丸哲山, 山本達雄, 白岩照男, 衛藤 光, 上村仁夫, 本田史朗: 表面一部水疱状を呈した巨大石灰化上皮腫の1例. 皮膚臨床 20: 940—941, 1978
- 4) 永谷裕幸, 秋月みわ子, 任 明佳, 宮下 文, 小林和夫, 若林俊治, 岸本三郎: 水疱様外観を呈した石灰化上皮腫. 皮紀 79: 271—279, 1984
- 5) 出光俊郎: 水疱様外観を呈した石灰化上皮腫. 臨皮 40: 964—965, 1986
- 6) 木村俊次: 特異な臨床像を呈した石灰化上皮腫の3例. 臨皮 31: 41—47, 1977
- 7) 道部 乗, 福土 堯: 特異な臨床像を呈した石灰化表皮腫の2例. 日皮会誌 87: 49, 1977
- 8) Uchiyama, N., Shindo, Y. and Saida, T.: Perforating pilomatricoma. J. cutan. Pathol. 13: 312—318, 1986
- 9) 稲垣安紀, 荒川雅美, 武井洋二, 幸田 衛, 植木宏明: 化膿性肉芽腫様外観を呈した石灰化上皮腫. 西日皮膚 48: 635—636, 1986
- 10) Hadlich, J. and Linse, R.: Zur klinischen Diagnostik des Epithelioma calcificans Malherbe. Dermatol. Monatsschr. 165: 432—439, 1979
- 11) 山崎 順: 有茎葡萄状腫を合併せる石灰化表皮腫の1例. 日皮会誌 36: 508—510, 1934